

「いやよ、行かないつて仰言らなけりや。」
 「これぢや息がつまつて、苦しくつて——。」
 「だつて、もういい加減に覺悟をなさいな。ここぢや誰だつて一度はひどい目に逢はなくちや。」
 「奥さん。」

そのまま、二人の聲は切れて了ふと、蒸氣もふつとりとまつてしまつた。

三

参木は疲ながら、トルコ風呂まで歸つて來た。だが、そのときは、もう甲谷は参木に逢ひに突堤へ行つた後だつた。

参木は應接室のソファに沈み込んだまま黙つてゐた。浴場の奥から湯女達の笑ふ聲と二緒に、ポルトギーズの猥雑な歌が聞えて來た。時々蒸氣を抜く音が壁を震動させると、テーブルの上のチューリップが、首を垂れたまま慄へてゐた。
 一人の湯女が彼の傍へ近寄つて來た。彼女は彼の横へ腰を降ろすと、横目で参木の高く縮つた鼻を眺めてゐた。

「眠いのか。」と参木は云つた。

女は兩手で顔を隠して俯向いた。

「風呂は空いてゐるのかね。」

女が黙つて頷くと、参木は云つた。

「ぢや、ひとつ頼まう。」

参木は前から此の無口な女が好きであつた。彼女の名はお杉と云ふ。お杉は参木が來ると、女たちの肩越しにいつも参木の顔をうつとりと眺めてゐた。

湯女達が狭い廊下いつぱいに、水々しい空氣をたてて、華やかに亂れて來た。

「まア、参木さん、暫くね。」

参木はステッキの握りの上に顎を乗せたまま、じろりと女達を見廻した。

「あなたの顔は、いつ見てもつまんなさうね。」と、一人が云つた。

「それや、借金があるからさ。」

「だつて借金なんか、誰でもあるわ。」

「それぢや、風呂へでも入れて貰はう。」

女達は、ぱつと崩れて笑ひ出した。そこへお杉が浴室の準備を整へて戻つて來た。参木は浴室へ這入ると、寝椅子の上へ仰向けに長くなつた。皮膚が湯氣に浸つて膨れ出した。彼はだんだんに眠くなると、ふと此のまま、蒸氣を出し放して眠つてみようと考えた。

彼はスイッチをひねるとタオルを銜へて眼を瞑ちた。身體が刻々に熱くなつた。もし此のまま死ねたら、とさう思ふと、競子の顔が浮んで來た。債鬼の周章でた顔がちらついた。惨忍な専務の喜ぶ顔が。——専務の食つた預金の穴を知つてゐるのは彼だけだつた。間もなく銀行は停止を食ふにちがひない。格子の中から見た無數の顔が、暴風のやうに渦巻くだらう。だが、駄目だ。何もかも、人間の鐵を製造するために出來てゐるのだ。——

ドアが開いた。誰でもいい。参木は眼を瞑つたまま動かなかった。空気が幅広い壓力で動揺した。すると、彼はいきなり、タオルで眼かくしをされてゐた。お柳だ。お柳なら、此の女は人間の鐵を延ばすのが商賣だ。

暫くそのまま浴室の中は静まつてゐた。お柳の背中の黄色い蜘蛛が、横はつた自分の身體を見詰めてゐる。と思ふと、椅子の上で、身體が鋭くだんだん尖角り出すのを彼は感じた。

「お杉さん。」参木は故意に、お杉の名前を云つてみた。

誰も彼には答へなかつた。参木はやがてお柳が自分に擦り寄るであらう誘ひを、お杉が自分にするものとして思ひたかつた。いや、それよりお柳に、自分がお杉と遊ぶ樂しみを知らせたかつた。彼はまだ一度もお柳の誘ひを赦したことがない。それ故お柳を怒らすことが、彼には彼女の欲情をますます華やかに感じる事が出來さうに思はれたのだ。彼は眼かくしをされたまま、にやにやしながら、兩手を擴げて身の廻りを探つてみた。

「おい、お杉さん、逃げようたつて逃がさぬぞ。俺の手は蜘蛛みたいな手だから、用心しておくれ。」

云ひながら、参木は自分の下手さに赤面した。だが、眼は見えぬ。やるだけやつて笑へば良

い。——
すると、彼の豫想とは反對に、急にドアが開いて誰か出て行く氣配がした。此の空虚な間に何事が起るのだらう。参木は暫くじつとしたまま、空氣に觸れる皮膚に意識を集めてゐた。と、突然、ドアの外で、荒々しい音がした。瞬間、彼の上へ、突き飛ばされた女があつた。すると、

女は彼の足元で泣き始めた。お杉だ。

参木は起つた事件の一切を了解した。彼はお柳に對して激しい怒りを感じて來た。だが、今怒り出しては、お杉が首になるのは分つてゐた。参木は自分でタオルを解くと、泣いてゐるお杉の亂れた髪を眺めてゐた。彼はお杉に黙つて浴室から出ると、服を着た。それから、彼は別室へ這入つてお柳を呼んだ。

お柳は笑ひながら這入つて來ると、何も知らぬがやうに、とぼけて彼に云つた。

「まア、随分今夜は遅かつたわね。」

「遅いは遅いが、しかし、さつきはどうしたんだ。」

「何が？」

「いや、あのお杉がさ。」と参木は云つた。

「あの子は駄目なの。働きが一寸もなくて。」

「それで、僕にひつつけようつて云ふんだな。」

「まア、さうしてただけりや、結構だわ。」

参木は自分の戯れが間もなく女一人の生活を奪ふのだと氣がついた。彼がお杉を救ふためには、お柳に頭を下げねばならぬのだ。だが、彼が彼女に頭を下げたら、なほ彼女はお杉を抛り出すに定つてゐるのだ。それなら、自分はどうすれば良いのだらう。——

参木は寢臺の上から、お柳の片手を持つと抱き寄せて云つた。

「おい、お柳さん、實は俺は、此の間から死ぬことはつまり考へてゐたんだが、あんたを見てる